

## 〈信〉の崩壊の果て——Nathaniel Hawthorne の “My Kinsman, Major Molineux” 試論

市川真澄

信じていた人が信じられなくなった時、われわれはいかなる行動を取るのか。人が信じられなくなった時とはいかなる時のことを言うのか。それは信ずることを禁ずる事実直面した時のことを言うのであろう。人を信ずることは自己を信ずることに等しい。故にこのような危機に直面した時、われわれはその事実から目を逸らしたり、それを歪曲したりすることによって、苦悩しながらも人を信じ続ける努力をすることが多い。換言すれば、人に対する〈信〉は、その人を自己と同一化することによってのみ生まれるのであるから、〈信〉を捨てることは、自己を捨てることと同じように非常に苦しいことである。他方、〈信〉を否定するような事実直面しながら、それから目を逸らしたり、それを歪曲したりして〈信〉を維持し続けることもそれと同じように苦しいことである。

The Book of JobのJobは、神を恐れる義人である。ある日、突然、神は彼の財産である牛、羊、ろば、らくだの計1万1千頭と10人の彼の子女を奪ってしまう。Jobの嘆き悲しみは、想像に余るものがある。普通の人だったら、「神も仏もあるものか」と世を呪い、神を呪うであろう。しかし、Jobは決して神を呪いはしなかった。彼は、地にひれふし、神に祈って「わたしは裸で女の胎を出た。また裸でかきこに帰ろう。主が支え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」と言う。Jobの災難はこれだけではなかった。全身腫物に悩まされ、灰の中にすわり瀬戸物で身をかき、顔も無惨に腫れただれ、とうていJobとは思えぬまで変貌してしまったが、それでも彼は神を呪わなかった。Jobは神への〈信〉を最後まで持ち続けた。

“My Kinsman, Major Molineux”の主人公RobinはJobのように〈信〉を最後まで持ち続けることはできなかった。Robinは、自分を世に出してくれる人だと、神のごとく信じている父の従兄弟の名士Major Molineuxを探し求めてニューイングランドの田舎からボストンにやって来る。しかし、町のあちこちを探し回るがMajor Molineuxの居所を尋ねると、どこでも冷たくあしらわれるばかりで、彼を見つけることはなかなかできない。Robinはついに親戚の名士に会うことができる。しかし、その名士は、「タールを塗られ、鳥の毛でまぶされたみじめな姿となって」辱しめを受けながらデモの中を荷車でひきまわされている。このような哀れな姿のMajor Molineuxを見たRobinは、市民と共に嘲笑の声をあげてしまう。RobinはMajor Molineuxに対する〈信〉を捨てたばかりでなく、〈信〉の対象であるMajor Molineux自身をも嘲笑してしまう。結末においてJobとRobinの〈信〉に対する態度は対照的である。

“My Kinsman, Major Molineux”は1832年に*The Token*誌に発表され、1852年に*The Snow Images and Other Twice-Told Tales*に収められた短篇である。これはHawthorneの28才の時の作品で、多角的な批評が試みられ近年とみに評価が高くなっ

た作品である。

この物語はアメリカがまだ英国から独立していなかった頃の話である。主人公 Robin が夜 9 時近くにニューイングランドの田舎から舟でボストンの船着場に到着したところで、この物語は始まり、およそ 2 時間後 Robin が哀れな姿となった Major Molineux に出会ったところで終わっている。この物語は闇の物語である。闇に現われる人物はすべて奇怪で異常である。Robin は船着場に着くと夢の世界へ、未知の世界へと拗り出される。Robin の純粋で素朴な田舎出の青年らしい出で立ちが ferryman の眼を通して描かれる。

親戚の Major Molineux は植民地政府の高官であり、Major Molineux の親戚であると聞いただけで誰もが態度を変え、自分を丁重に扱ってくれるものと Robin は信じ切っている。Robin の Molineux に対する〈信〉はどんな攻撃を受けてもびくともしない堅固な城塞のようなものである。この城塞がどのように崩壊するかが興味の中心である。

Robin は Molineux の家を探すために船着場を出て狭い道に入る。周囲を見渡すが、Molineux が住むのにふさわしい家は一軒も見当らない。特別料金で運んでくれた ferryman に Molineux の家への道順を尋ねれば、彼は大いに喜んで道を教えてくれたのにと、Robin は残念に思う。しばらく行くと、道が少し広くなり、家も立派になる。磨かれた長い杖を持った、「えへん、えへん」と特長のある咳払いをする老市民に出会う。Robin はなれなれしく彼のコートの手を把んで、Major Molineux の家は何処かと聞く。Major Molineux の親戚だということで少し横柄な態度に出る。Molineux への〈信〉が彼を強くし、傲慢にしている。信仰心の篤いはずの人が、傲慢であったり、非常識なことを平気でやったりすることがあるが、神や仏であるという錯覚が彼にそのような態度を取らせるのだ。

しかし、Robin の考えもしなかったことが起こる。その老市民は Robin に敬意を表すどころか、「Molineux なんか知らない、コートを離せ」と Robin を怒鳴る。Robin は驚いてその老市民の服の手を離す。それと同時にすぐ近くの理髪店から、Robin を嘲笑うような声が起る。これは Molineux に対する〈信〉にとっての大きな攻撃であったはずである。しかし、Robin はこの事実を自分に都合のいいように解釈する。あの老市民は地方出身の議員だから、Major Molineux を知らないのだと、またあの笑い声はあんな老市民を案内人に選んだことを嘲笑う声だと Robin は思う。Robin の Major Molineux に対する〈信〉は少しも揺らがない。

Robin は迷路のような通り——Hawthorne の物語の特長であるロマンスの世界——へ入って行く。その通りを少し行くと食欲をそそるいい匂いが漂っている。その匂いに誘われるように Robin は旅籠に入っていく。客の中に異様な容貌の男がいるのに気づく。この男は、物語の後半に二度ばかり現れる重要な人物である。旅籠の主人から丁重な挨拶を受けた Robin は、自分が Major Molineux の親戚であることを知っているので旅籠の主人は丁重なのだと思う。またもや意外なことが起こる。Robin が夕食を注文するだけの金がなく、ただ Major Molineux の家へ行く道を教えてもらうために来たのだと主人に言うと主人の態度は一変し、Robin は壁に貼ってある写真のお尋ね者と間違えられ、その旅籠から追い出される。旅籠から出る時、また、背後から嘲笑を浴びせられる。しかし、Robin は Major Molineux への〈信〉に対する攻撃を次のように解釈し切り抜ける。

“Now is it not strange,” thought Robin, with his usual shrewdness, “is it not strange that the confession of an empty pocket should outweigh the

name of my kinsman, Major Molineux? Oh, if I had one of those grinning rascals in the woods, where I and my oak sapling grew up together, I would teach him that my arm is heavy though my purse be light!"<sup>1</sup>

この2つの事件は、RobinのMolineuxに対する〈信〉にとってかなり大きな打撃であったはずである。しかし、Robinは真相を見ようとせず、事実を自分の都合のよいように解釈することによってこの攻撃をかわして行く。〈信〉を禁ずるような事実にもかかわらず〈信〉を維持していくことは非常に辛いことであり、Robinはかなりの疲労を覚える。それと同時に作者は主人公Robinを現実の世界から夢の世界へとさらに深く導入していく。

Robinは狭い道から広い道に出る。月の光の下で多種多様に着飾った人々が散策している。洋行帰りの青年たちがはやりの曲に合わせて踊りながら歩いて行く。Robinには、この情景は現実の世界の情景ではなく夢の世界の情景のように思われる。丁度その時「えへん」と咳払いしながら歩く男の気配を感じ、それが最初に出会った老市民だと思い、逃げるように角を曲がる。その時までRobinは、すっかり疲れ果て、精神状態も少しおかしくなっている。その上焦りも出て来て、暴力を以てしてもMajor Molineuxの居所をつきとめたいと思う。丁度タイミングよく、少し入り口の戸が開いている家があることに気づく。よく見ると戸の間から女性の服装が見える。“My luck may be better here,”とRobinは独り言をつぶやく。そのlady of the scarlet petticoatにMajor Molineuxの家を尋ねると、Molineuxはここに住んでいると彼女は答える。見るとその家はあまりにも狭く、あまりにも暗く、とてもMolineuxが住んでいる家とは思えない。Robinはladyの言葉を疑わざるを得ない。しかし、Robinの態度がかなり変化したことに読者は気づくに相異なる。以前のRobinだったら、神のごとく信じているMolineuxの居所をこんなにかがわしいladyに聞くはずはない。ましてや、ladyの言葉を信じて狭い、暗い家のなかへMolineuxに会うために入ることなど、以前のRobinには考えられないことである。これは、Robinの〈信〉が揺らいだ証拠であると共に、前述した2つの出来事にもかかわらず〈信〉を保ってきたことで、Robinは疲労し、精神状態が少し異常になったのである。人に対する〈信〉は自己に対する〈信〉に等しい。〈信〉を否定する事実にもかかわらず、人に対する〈信〉を維持するためには精神的に異常にならざるを得ない。

Robinはlady of the scarlet petticoatによって彼女の家に引きずり込まれそうになった時、watchmanが現われ、Robinは救われる。ランタンを持ったferrymanとwatchmanは、Robinを最後の場面へと導く案内人の役を担っている。ferrymanがいなかったら、ボストンの町へ入ることができなかつただろうし、watchmanがいなかったら、あのかがわしいladyと意気投合し、Molineux探索の旅は終焉を迎えていただろう。RobinはwatchmanにMajor Molineuxの家に連れていってくれるように頼むが、watchmanは返事さえもしない。またもや通りから眠たそうな声が聞こえてくる。Robinは気が狂ったように通りをさ迷う。棍棒の力を借りてでも、Major Molineuxの居所を聞き出そうと決心する。そう決意をして、教会の壁の横を通っている時に大柄の男に出会う。その男にMajor Molineuxの住所を尋ねる。その男は旅籠で見た男に相違ないが、少し容貌が変わっている。顔の一方が赤く輝き、他方が真っ黒である。その異様な容貌の男から、1時間待てば、Major Molineuxがここを通ると告げられる。Robinは教会の入り口の石段の上で待つことになる。

その石段の向かい側に大きな立派な館がある。これこそ Major Molineux が住んでいる家だと思う。周囲には眩きに似た音が漂っている。不思議なことに、Robin の耳に眩きを破って小さな叫び声が届く。周囲には眠りを誘うような音が流れ、Robin は眠りを追い払うために教会の中をのぞく。教会には誰もいなく、ただ光のみが内部を照らしている。Robin は森の一番深いところにいるときよりも孤独を感じる。この時恐ろしい考えが Robin を襲う。懸命に探し求めている Major Molineux は、実際には経帷子を着けたまま教会の墓地の中で朽ち果て、亡霊となって今にも入り口から出て来るように思える。Robin は身震いする。Robin はこのような恐ろしい考えを払い除けるために、家での夕べの祈りの情景を思い浮べる。自分の不在を嘆く家族のことを想像し、家へ早く帰りたい一心になる。Robin の Molineux に対する〈信〉はこの時点でかなり低下する。〈信〉の低下に比例するように Robin は現実の世界から夢の世界へとさらに進入して行く。

睡魔と戦っている Robin の前に一人の gentleman が現われる。Robin は gentleman に「Major Molineux をここで一晩中待たねばならないのか」と尋ねる。さらに Robin は次のように述べる。

“…I have been searching, half the night, for one Major Molineux ; Now, sir, is there really such a person in these parts, or am I dreaming ?” (81)

この質問は、Robin の Molineux に対する〈信〉がかなり揺らいだことを示している。gentleman は、Robin を会話の中へ引きずり込むことによって Robin と Major Molineux の出会いを実現する大切な役を担っている。

周囲がいよいよ賑やかになって来る。太鼓やトランペットの音が聞こえ、カーニバルの行列がこちらへ近付いてくるかのように感じられる。楽しそうな楽器の音に、近所の家々の窓が開き、人々が顔を出す。Robin は gentleman に自分も行列に加わりたいたいと言うと gentleman は次のように言う。

“you forget that we must wait here for your kinsman, and there is reason to believe that he will pass by, in the course of a very few moments.” (83)

gentleman は、その行列に加わろうとする Robin を引き止める。叫び声、笑い声、調子はずれのラッパの音がますます大きくなり、集団が次第に数を増しながら角を曲がって現われる。旅籠で見かけ、さらに教会の壁の側で見た2つの顔の男が多くの従者を連れて、集団の中から現われる。その2つの顔の男が、行列に向かって止まれと合図すると、ラッパの音が止み、人々の叫び声や笑いが消え、人々の小さなざわめきのみが残る。すると Robin の眼前に、「タールを塗られ、鳥の毛でまぶされたみじめな姿の Major Molineux」が馬車に乗せられて現われる。それと同時に Robin がその夜出会った人物が順々にしかも逆の順序で現われる。それに呼応するかのごとくその晩、Robin を嘲笑した理髪店の従業員や旅籠にいた客たちの声が聞こえてくる。Robin は狂ったように大きな声を発する。Robin の叫び声が他の誰のより大きかったと作者は書いている。Robin にこのような奇妙な態度を取らせたのは、Robin の「精神的酩酊状態」(“mental inebriety”) (85)であった。田舎出の純粋な青年にとって、自分の心底信じている人のこのような哀れな姿を

見ることは耐えがたいことである。このような場合に Robin の取る態度は 2 つしかない。つまり泣き喚くか笑ってしまうかのどちらかである。

人に対する〈信〉は簡単に捨てることはできない。人に対する〈信〉を捨て去ることは、自己を捨てることであると同時に自己の自立の可能性を意味する。Robin は gentleman のお陰で Major Molineux の哀れな姿を見ることによって〈信〉を捨てることができた。しかし、そのための精神的障害もまた大きかった。そのことを知っている gentleman は、Robin が町には愛想がつかたので田舎に帰りたいので舟着場へ行く道を教えてほしいと言うと「今夜はいけない。数日後に教えよう」と答える。gentleman は、Robin がこの trauma から回復するには“some few days”が必要であることを知っている。trauma から回復した暁には、Robin は完全に自立した青年になる。〈信〉とは理屈や理論によって生まれるのではなく、ただおのずと向こうからやってきて、〈私〉をつかむ。それ故に〈信〉を持つことは〈私〉にとって宿命的であり、本当の〈信〉は命を犠牲にしても守られる。しかし、そのような〈信〉は、キルケゴールも言うように「奇跡」である。Job は神に対する〈信〉を神自身によってもたらされた災難にもかかわらず守り通す。Robin は Major Molineux に対する〈信〉を捨てることによって、一時的にせよ精神異常を来す。しかし、それは自立への道を開いたことを意味する。歴史の発展も人間の成長も〈信〉を捨てることによって達成される。天道説への〈信〉を捨てることによって歴史は飛躍的に進歩する。子供は母への〈信〉を捨て去ることによって独立した人間に成長する。この物語の冒頭の部分が暗示するように、英国への〈信〉を捨て去ることによって米国の英国からの独立が可能になった。ニーチェも言っているように、神への〈信〉を捨て去ることによって人間は不安に満ちた世界の在り様を認識できる。この短篇は、人への〈信〉の崩壊の意義を Robin の体験を通して探求し、カフカの「城」の提示する人間の不安や不条理を語った極めて現代的な短篇である。

「城」の主人公である測量技師の K は、“城”の要請で、ある寒い冬の夜、城のある場所にやってくる。K の探索の目標は城であるが、城のある山は霧に包まれていて見えない。村人たちは K の様子を遠くから見守っているだけで、K と関わりをもとめとしない。あげくの果てに、“城”の関係者は K を呼んだ覚えはないといって、彼を追い返そうとする。K は城に入ることもできなければ村に安住することもできず、どこかに通じているであろう道をさ迷い歩くが、目的地に近づくこともできなければ遠ざかることもできない。やっとのことで村の酒場の娘フリーダと知り合いになって、フリーダを愛するが、彼女は K を捨てて別の男と村から去って行ってしまふ。

Robin の探索の目標である Major Molineux のイメージは次第にぼやけてくる。カフカの「城」と Hawthorne の“My Kinsman, Major Molineux”は、物語が夜に始まり、夢の世界で進行し、探索の目標は明白でなく、主人公は不安と不条理の中で迷う。2 作品の類似は明白である。

1832 年に Hawthorne が現代文学の重要なテーマである人間の不安と不条理を扱った作品を書いたことは驚くべきである。近年この作品が批評家によって注目されるようになったことは当然である。この短編は、時代、民族、場所を超えて人々の心を把み、魅了する。“My Kinsman, Major Molineux”は、英語で書かれた最も優れた短編の一つであるといっても過言ではない。

(注)

- 1 *Hawthorne: Tales and Sketches* (New York: The Library of America, 1982), p73. 以下数字のみを記す.

### 参 考 文 献

酒本雅之『ホーソー——陰画世界へのたび』(冬樹社, 1977)

Harold Bloom, ed., *Nathaniel Hawthorne* (New York: Chelsea House Publishers, 1986)

Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (Twayne, 1965)